

キリストの中に入る洗礼

ローマの信徒への手紙 6 : 3 - 11



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年7月2日

聖霊降臨後第5主日

上野聖ヨハネ教会にて

今日は使徒書の中で「洗礼」のことを聞きました。こう始ま
っていました。

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエ
スに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその
死にあずかるために洗礼を受けたことを。」ローマ 6:3

「それともあなたがたは知らないのですか」と、パウロは強
い調子で語っています。それは、教会の人々の間で洗礼の意味
があいまいになってしまっていたからでしょう。また特に、
「我々は神にすべて赦されているのだから、もう何をしたって
かまわない」という、罪や悪の中に居直ろうとするような風潮
が一部にあったからのようです。そこでパウロは、何としても
洗礼の大事な意味を皆に知ってほしいと願って語ります。

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエ
スに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその
死にあずかるために洗礼を受けたことを。」

「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたした
ち」と言われています。洗礼とは、キリストに結ばれることだ。
イエス・キリストと決定的に結ばれるのが洗礼だ、というので
す。ここの所をもう少し確かめてみたいと思って、ギリシア語
の原文を見てみました。するとこんなふう書いてあります。

最初のところを直訳してみます。

「あなたがたはキリスト・イエスの中へと洗礼を受けた」

「キリスト・イエスの中へと」が印象的です。

“into Christ Jesus” 「キリスト・イエスの中へ」

洗礼というのは、わたしたちの側が信じて約束するといったこと（もちろんそれはとても大切なことなのですが）を超えて、キリストの中にわたしが入ってしまうことだ、というのです。救い主イエスがわたしたちを招いて引き寄せて、ご自身の中に迎え入れてくださる。それでわたしたちはイエスさまの中に入ってしまった。そのとき同時に、わたしたちは自分の真心と信仰をイエスさまに注ぎ込んだ。これが洗礼なのです。

わたしたちの聖書（新共同訳）はこう訳しています。

「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを」

この後半「その死にあずかる」というところもギリシア語で確かめてみました。するとずいぶん単純な言葉づかいです。また直訳します。

「あなたがたは彼（キリスト・イエス）の死の中へと洗礼を受けた」

洗礼において、わたしたちはキリストの死の中へと入れられた。キリストの死の中に入った以上は、古いわたしも死んだの

です。それはキリストとともに新しいわたしの命が始まるため、わたしたちが新しい命に生きるためです。

8節を読みましょう。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにとなると信じます。」

洗礼を受けたわたしたちは、しっかりキリストとともに生きるのです。

これらのパウロの言葉には、彼自身の身に起こったことが重ねられているに違いありません。パウロはどのようにして洗礼を受けたのでしょうか。それは使徒言行録第9章に語られています。

ご存じのようにパウロ（サウロ）は元々キリスト教迫害の先頭に立っていた人でした。このときも、シリアのダマスコにいるクリスチャンたちを捕らえて縛り上げ、エルサレムに連行するつもりで道を急いでいました。ところが突然、彼は天からの光に打たれて倒れました。そのとき彼は「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いたのです。

「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスだ」という答えがありました。彼は目が見えなくなり、手を引かれてダマスコに行き、ユダという人の家に世話になりました。彼は、「**3日間、目が見えず、食べも**

飲みもしなかった」(9:9)と書かれています。

おそらくこの3日間は、パウロにとって激しい苦しみの3日間だったと思います。今まで信じてきたことが崩れてしまった。そのうえ、わたしの想像なのですが、彼は、罪のない人の殺害に荷担したという、魂が死ぬほどの罪責感があったのではないかと思います。

彼は教会の有力な指導者ステパノが石で打ち殺される時、彼はそれに賛成し、石を投げる人たちの服の番をしていたのです。直接手を下したのではないにせよ、ステパノの死に自分は責任がある。取り返しのつかない罪を犯した自分は生きる資格もない。食べ物も喉を通りませんでした。しかしその彼が、アナニヤという人によってイエスの福音を知らされ、赦される経験をした。新しい使命を与えられました。アナニヤが彼の上に手を置いて祈ってくれたとき、彼の目が開かれます。使徒言行録にはこう書かれています。

「すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。」9:18-19

このようにしてパウロは洗礼を受けたのです。

古い自分はキリストの死の中に入り、キリストとともに死んだ。キリストの愛の中に溺れ死んだ。キリストの中に迎え入れ

られた。そして復活のキリストとともに新しく生きることが許された。何ものにも換えられない喜びです。

「あなたがたはキリスト・イエスの中へと洗礼を受けた。彼（キリスト・イエス）の死の中へと洗礼を受けた」6:3

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなる」6:8

これはパウロ自身が身をもって経験したことですが、同時にあらゆる人に、わたしたちに当てはまることなのです。

洗礼によってわたしたちはキリストの中に迎え入れられた。キリストがわたしを包んでくださった。またキリストがわたしの内に宿ってくださった。これが洗礼です。こんなに心強いことはありません。

洗礼は、神が、イエス・キリストがわたしをしっかりと捕らえてくださった、言わば客観的な事実です。わたしたちはこの客観的な土台の上に生かされます。それは、わたしたちの側の不信仰によって崩れてなくなるものではありません。わたしたちの側の決意は鈍り、信仰は時によって揺らぎます。けれども、洗礼によってわたしがキリストのものとされたという事実は揺らぎません。

宗教改革者マルチン・ルターは、あるとき非常な不安に陥り、悪魔の攻撃にさらされていると感じたそうです。そのとき彼は白墨を取って机の上に「わたしは洗礼を受けている」と書いたそうです。そうして平安を得たと言われます。

わたしたちはいつかは地上の生涯の終わりを迎えます。その時を穏やかに平安に過ごしたい。けれども洗礼によって神さまがわたしの責任を引き受けてくださった以上は、どんなに不安で苦しんで不格好な様を見せたとしてもかまわないのです。イエス・キリストが一切を引き受けてくださっているからです。

「あなたがたはキリスト・イエスの中へと洗礼を受けた」

祈ります。

神さま、洗礼によってわたしたちをキリストの内に迎え入れ、キリストのものとしてくださったことを感謝いたします。洗礼の力と喜びを、新しくわたしたちにお与えください。洗礼を受けた者として、勇気と喜びをもって主とともに歩ませてください。また多くの人を洗礼の祝福へと招いてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン